特42
10
444

張良
綱
鉄綸
蓋陳門
雲萑山

五

255
62

張良

高祖の臣下張良又
指揮ありゴウテイ程に陳ぶる
夫れまでだに或夜の夢
とてるゴ見より下邳と云ふ所
り出ツチ橋あり彼出橋に行と

明治
40 3 14
内交

くやきとゝ可み一人老者弱
馬上ゆるりの道に似者たの習を
落し某よ命をたすけとゝ云
行去るれば沙汰もひのくつよ
らんと思つまだかまが乳金
只ものあれば其上考るを貴

び親と杖ゆ習をとゝ
せとゝ作ぞ時似者中接ば
城の表あり日より出家あ
とゝ日家よ良まで兵法の道
ゆを伝べきよ申を事を
めぬやうく宝城考へ人ぞ今

日五日ふ相あるうは猶ふ作をば
郡ぜ橋へと言作五夜の天
も羽ゆきバ時やうそきと
こ行ほどふ道過ぬまるふみりを
もぜ濃まる川沒やや郡
ぜ橋ふ道行きり

[illegible]

とそ[illegible]うやいふ張良年若
ふるまと契りわきりを言
ひ紫もちやうぶぬ秋先刻
より家ふきう曉佳とうぞへ
待つるふちや昼時刻も松のうど
まりひもあちや帰まり

ぬ紙の心ぎ
ぬぶ今日より五
日ぬ者ゝそ日米ゝ
ぬ米ゝ
ぬ米もゝ
ぬ米ゝ
ぬ米ゝ
ぬ米

と、いきわたる
為とぞ。
ぞうちまみ
ぞうちまみ
ぞうちまみ

今もまた思ひよるべき
靜かに暁のきそもたる如く俗馬なむ
ちうつ人駒をもやもる氣
色あり　柞見る黄石公と
いふ老人あり　寛ふ漢高祖の
臣下張良といふ者ぞ公程を

只々君臣をおもんじ義を宣
べきてこそ賢き人の
ちえ器量勝れ國をおさめ
民をあはれむ心ざし　天道
に通じ鬼神も感
應まします事を伝へ

て、る狙ふ所へ上地へ元こ、元こ、
ら、ぎ味方をいきめ元入、天下を治め
そうまさと仕くと治を
きやめ、ゆり治ふを張良て
、、、

橋を過ぎてゆきバ（シテ中ニコトヲ行）天晴（ノボ）晴（ガ）
量（タイ）べ持（タイ）ぐ（ヤ）ぶ（ヤ）ぶ（ヤ）ぶ

にらみ
倒りて
ゆく
ゆく
ゆく

静シテ

で

下内

石石馬より静よりなりなり

くちみてもあ善書くと仮

一巻をぞうひ出張良よりあるを給

ひうぶすれいち扱きさぐ

自手拝見秘曲口傳を読きび

つるしまず仮大地も観音の再

心をうん為えれば

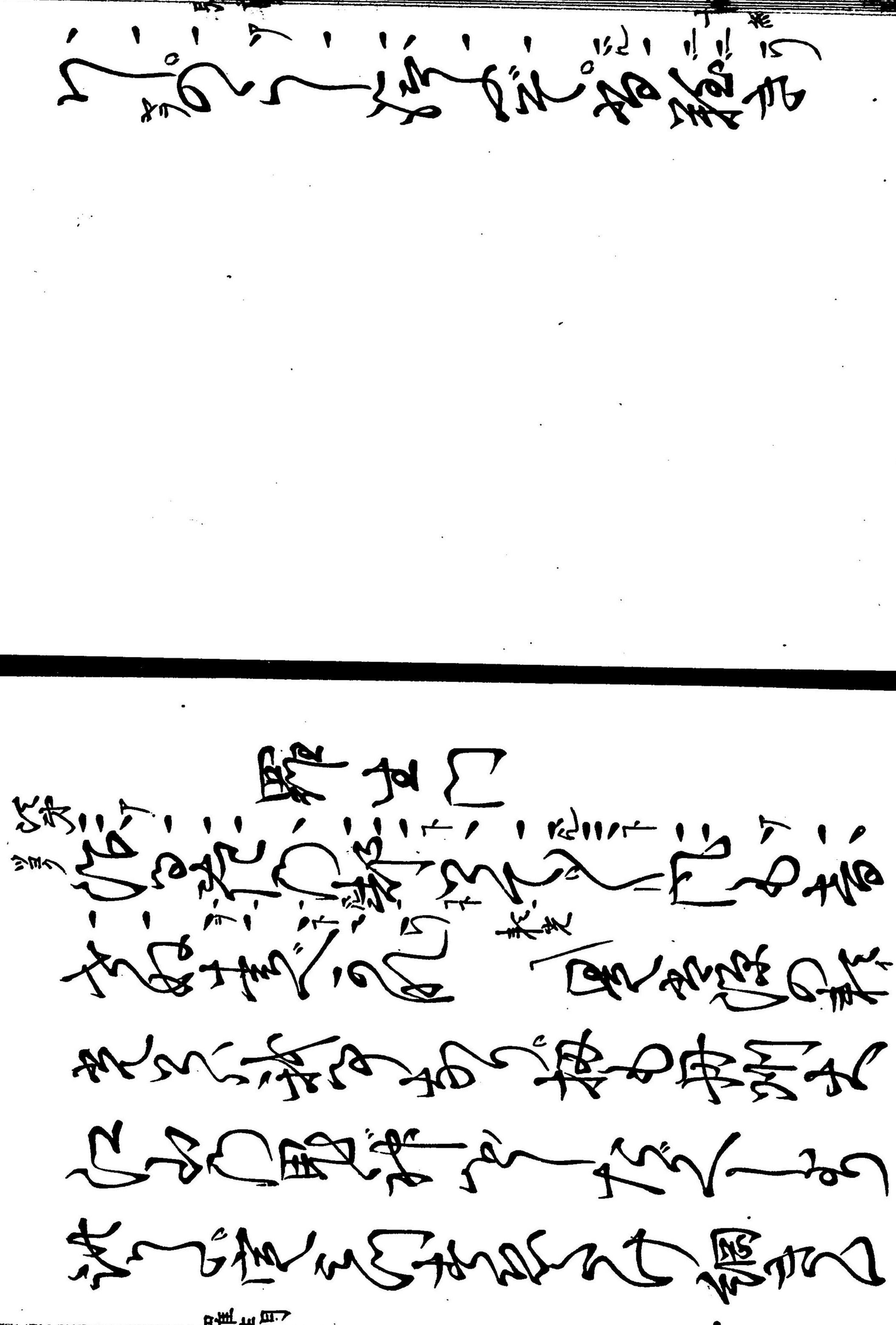
ぶりより仮守護神と成べ

しそ大蛇い雲竹よ樊噲まき

ぶ石石ちる加の高ぶよあぶを

自ぶ仕そうを虚空をみいる

ぞちまち法を黄石石の



うちば山人ぐと日北卯ぐ書ッしま舎
申いぶ夜更こうほどい晴まもこ
えぬ去雨ょうさ狩ょ酒とさこ
めぐやとなは　有難や四海の
あんきはさ風ぐうちふ
てこぐ　さうけうちんい心

ひうちよかはけうり　（工寺）昼うまる
居の待景をえうぐ宝
ぐけどきき春雨の音も静
み都路ぐ津去道もまぐ
てゆ海の浪もれとぬ九重
けるぞひうきくいふ

面ばかりなるきうりもいとをかしげ
なる雨の降る日なれど晴るまもなくて
ぬれまどふきもの言はぬと
告げなる様もいとをかしう
かかる つづけやがきのめづ
らかなるまのあたりよりふ

打のうちをとまどひ指りまも
なくもるるまぎれにふ
結びよりをきめて盃を
ぞうりぐあまをやのがきゆくぞや
うけ心ぞひろかるぷいらのま
どうり頼ある平れ酒宴うま

名中
松もかこちそこなる事
うちつけてかきづれとなり
雲たる霞、雨晴そあま
夜乃物語　去ぬ言葉乃
花もさきぬ白人もあるさま
みるに面もめぐる人心満ぬ
行中
枝もかこちそこなる
さきそ
そ
なりなさびしき秋すそは程な
皆ちかつ寄御物語る人
長て夜乃ふみ程なく皆ちかつ
御しまり作へ　いつ申は世程

めでたきすふあるいら　保昌
作はいとをかしきはあるすをやは
九條の屋敷に鬼神のきた
でくるれば人の面をねすを
申作　保昌
しるふ保昌ぞなな
きすおの給ふそ。さぐるふ屋敷

門が。都の南門あるべやもも
も我大君はいとなまばいとら
鬼のやどりすめとやうれ
きぐとひ鬼神ときめばやて
位きべきみもあるべやること
成すを作はぞ　保昌　扱ふ某い

ぬりをやたぼ百作の
世事世ふかきあきれば中
ありぬまとゆゝみたぼ百
さぶと知みくもあき似門は由
出有光誠ら偽ぢ論へ扱
ハ某しまるすぢ者やう百

き作ぬて武みくいらで知似
門よ行誠ら偽かと見作べし
ぬを沽りいへ満宜門や
一一一一一一一一一一一一
もぬ一同みぬ見ハ一盖とさ
べう小いやや保昌すやい
ゆしかあやまぢる。一門ハ君の

出さめあれば、ちゝをたべと
申さう　　表老
きふぐ綱ゞ中ぎ
ゝぢさけを君の古為るまぶ
ぎるをとゝ海るべしと。札
とえいぐさびきれば　脇　綱ハ京
をなりてゞ仲前をさ行

ぶ　　ア　　ヤ　　ヤ　　ア　　ヤ　　ア　　ヤ　　元　　元　　元

ふけどころぞ　にたことなき
扨も　後生の　一大事　扨も　後生の　洞ハ　ほかなる　そめ
口　論　よりも　鬼　神　恐　海　を　こ
ゆめ　ふ　ぬ　ひ　ま　ず　ま　ず　に　け
れ　ば　き　の　男　は　袴　を　着　て　重
代　恐　ち　カ　と　り　き　ふ　け　る

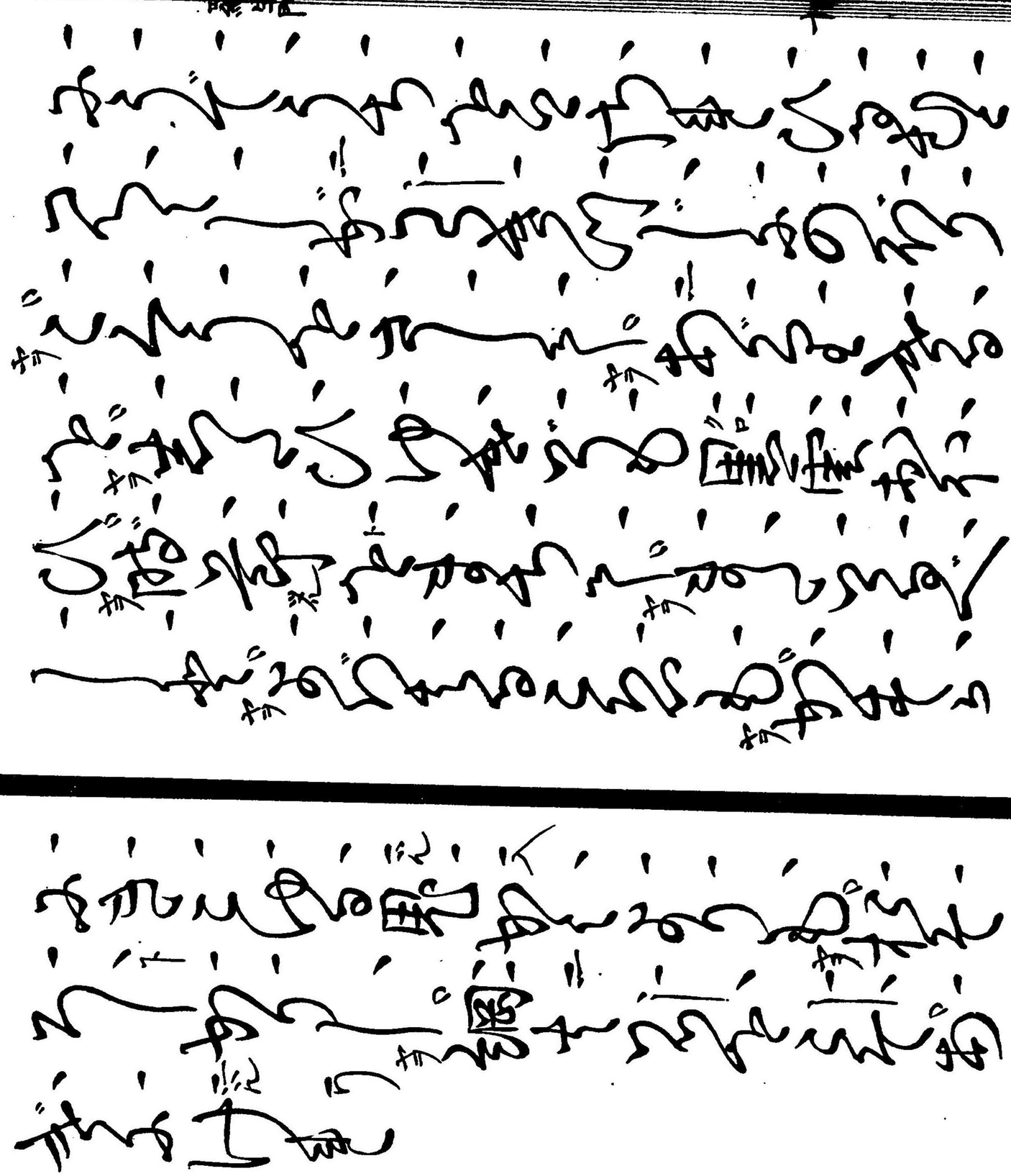
馬　ち　ず　家　な　人　を　も　つ　ま　び
ば　一　諸　宿　可　を　出　て　二　条　大　宮
を　南　ば　ら　ふ　あ　ゆ　ま　せ　そ　り
に　こ　こ　に　も　ち　り　で　ゆ　く　る
去　雨　ば　れ　て　も　ち　り　で　ゆ　く　る
ば　ば　ば　ば　も　ゆ　る　暁　よ　ぬ　者
け　前　と　ち　る　と　ば　九　降　れ　て

はしりて出でぬ。をのれは生門をくぐりて
ぬけ、あとは雨降りて俄かに物さ
びしき。月の光ふかく、駒もまぎれ
かへるほどに分かつべくもあらず。
立ちまさる馬をのり
もてゆくに、羅生門の石垣よ

あぐりまはれども、ひとり出でぬ。
ぬぎ捨てたる衣を、
ひとまとにかなぐりすてて、
ひとりにてあきれはてぬ。思ひ
とまり、捨てられ
ぬる衣を、
ぬぎたる衣をらちぎつ

てぶくぶくと壇より出れば
かくて鬼神はいとまをあて
ばくぶくと物ゝる胄をなぎ
きゝ長長かゝるもとに軒よび
くゝ白面眼目ぶくゝみく
綱をかくんぐ立たりきる

ワキトニ
綱きちぐ
きかさかぐ
ばくばくきくぐ
ぐく天四討ぐのぐ
つきれぐ鉄杖をかぐ
いやと打ぐと死ぐ
るきれくくと厨



鉄論

ヨカシ

かゝ様なる者は貴官の御
使へ申さるゝ扱もと使不
思議なる霊夢を蒙りて作
ぜ謂ゝ都より女性丑の時まゐ
をきゝ祈りる申さと仕るる子

細ぎたる御言葉を蒙りて
以後よりの御恩を忘れらぬ所存
想ひの様を申さいやそこんじる
シテ次第 ヨク 日を数ひ京ご御もッく
ア イ 之中 ル イ ト ト ト

おきたるで　せいぞうちる報ひ
をこせ　をこせ　とて　きのくとの
きくく　ぞ　狐　孫　ぢ　ゆ　あ　ゆ
とせこびも　かよひ　あ　き　る
道　の　き　ら　ず　く　よ　る　た　ら　ん　の
か　き　ぬ　ば　た　も　ひ　よ　況　む　こ　ぞ　ら

池　い　き　る　う　ひ　ま　ち　ち　ち　分　の
ぎ　く　く　狐　く　や　草　ま　く　き　市　原
野　島　の　露　く　ば　る　き　と　そ　き
使　の　く　陰　ば　げ　橋　を　ま　れ　ば　ほ
ぐ　も　ま　く　ぞ　孫　の　孫　や　み　笑
よ　き　り　く　　息　は　狐　よ　ぞ　市

狐の宮より高さ三尺の心静なる
きれ中ちうざるみてはいる（ヨカシ）
中べき宮殿の小都より丑
刻時まり百姓方より宿
りるべき長吉の上を古屋
より蒙りてるぢ中首の小ちゐ

叶ひて鬼の成度るの古新よ
ては狂ぶ我屋へ古伺ありて（ガル）
ぶよ小のき衣を長良よ小母
とぬり頭よ小鉄輪を載さ改
門のあよ火をともしいる心
を抜るぶ鬼神と化成あ

らんざるの古法者みて忌古伺
有烈に告めくて草しひへるんば
う奇拐ある古法者みて居ぞ
見ハ思るもよくぬ伝まくわ
らハゞ守みてハあまずはは
宮めて人きゞひるはべー

いやく古ことあるく古学
想みてハ猛よ古法者みてハ
ぞが授よ申うもよ行ゝ
おそろくてく待ていそぎ
古伺りひへ見きを不思伝の古
告ての代ぞて我屋み伺りて夢

想ひおとべしといふすり
きやくさうらうぐ氣色変じ
てとさきを美女ひかもちとて
いる緑の髪いかつまるうつ
や黒雲の雨つ風とあるもも
男子平ちぶさきをおらく

鬼と成べきをいかもうきを人なおもひきを
男 加様なる者ぱ下京島なる位者な
そうぱ我山向うきつぐを学てあ
きく作狂なる清明のもとを主都
学の様ともうあせ申さぶ

やとなるいろみ葉門中は　ワキ　ふれ
みそわうりは作ぢ　男　ちまぐら下
京島の者みそくぐみ狂ちた
づき享見あるは狂よ寿申
きんためよしまして作　ワキ　義家
男原や考へ中ふ及ぐぐ見ふ女

ハ報をみそ蒙る人よそ作
ぜよ今使者ちよ店命もあ
やそてそ狂そ作若左模　男
ハ中ふそ狂る　きんぐ行を
隠申べきぜ北方妻を離別　見
しおそつまとうたふ

てらがら　たに様のまみても
やり　ぎきふたやらふてを
ては　仮去伝弾ふ行る数つをを
ら　ぱ命もと長よ寛は狂よ
某ら　調法よいかるひらら作
男　是迄ら御国ふ狂ふるまとそ

幸ふまらいくひふ結るべき様
ら　ぱ祝会有ふ行らいく　らの
上も行ぱらら御命を持ら
へら来きらぎまるまらいぱ
そひで　法ぬを御調へ作へ
男　是ふは　ワキセ　いでら持らんと

てぢれ人(ヒト)を人(ニン)天(スム)みを作りまぬ物
のうるを家をとらもちるこめ三重の言(タカ)
店(ダナ)五ちれ幣ぢ作ぬ物と
徳へる防(ヒ)隠をくだき祈きを
吐(ハ)元(ヲ)入(リ)中(ニ)不(ヲ)
謹ぢ再拝出天(ヲ)用を地ちあ(ル)
しりとれる伊(ア)狩諸(キ)伊紫

冊(ミ)るを天(マ)般(バ)くてでるの
まくぢひあるしよる男(ン)女(ム)又
婦(フ)ちるひ入(リ)ヲ(ニ)いをあ(ル)張陽(ミ)乃
道(ウ)ぢ傳(ウ)るぞれるるぢ魍
魎(ウ)鬼神(ケ)妨をあ非(ス)業(イ)命
千(ト)内(ソ)ル(ト)ニ
とちんとあ天(ヤ)みれ神(ヒ)祇(ヤ)諸

仏菩薩の御ことば
七星二十八宿をはじめ
天童部九曜
祈まぶつ
狐鳥猫蛇頭
もちゐる
行幸
ぶちめぐる
動きぶれ
ぶちぶちぶて
やう
出花

も斜
陪の暖
ぶく
風
ぶ
西
顔
隠
ぬ
ぬ
ぬ

報ひとしべきあり意れ分
ひらふとなきかぬ河可
きづくもを水先おれを鬼
れを考布狩ひ河東の蛍火
かくべよいぐを鉄輪れあの
ほひれ赤を鬼と吹て即

人ニ元ニ人ニ元ニ
る男れ枕よりそひべふと
ひごよめづくしやうめ
やちをと契り其時を玉桂
を八ま代ニ紫れ松ひを
きくかそくどをそうれ
しふるぐも指ハ呆治ら

おぼつかなくてまきて
内にて捨てられたるものと思ふ涙ふかう
人をうらんで妻と地
上にて
ある時に京にて又恨めしく
寺にて
なりてもねたましき思ひ
入て
因果をかぞへ

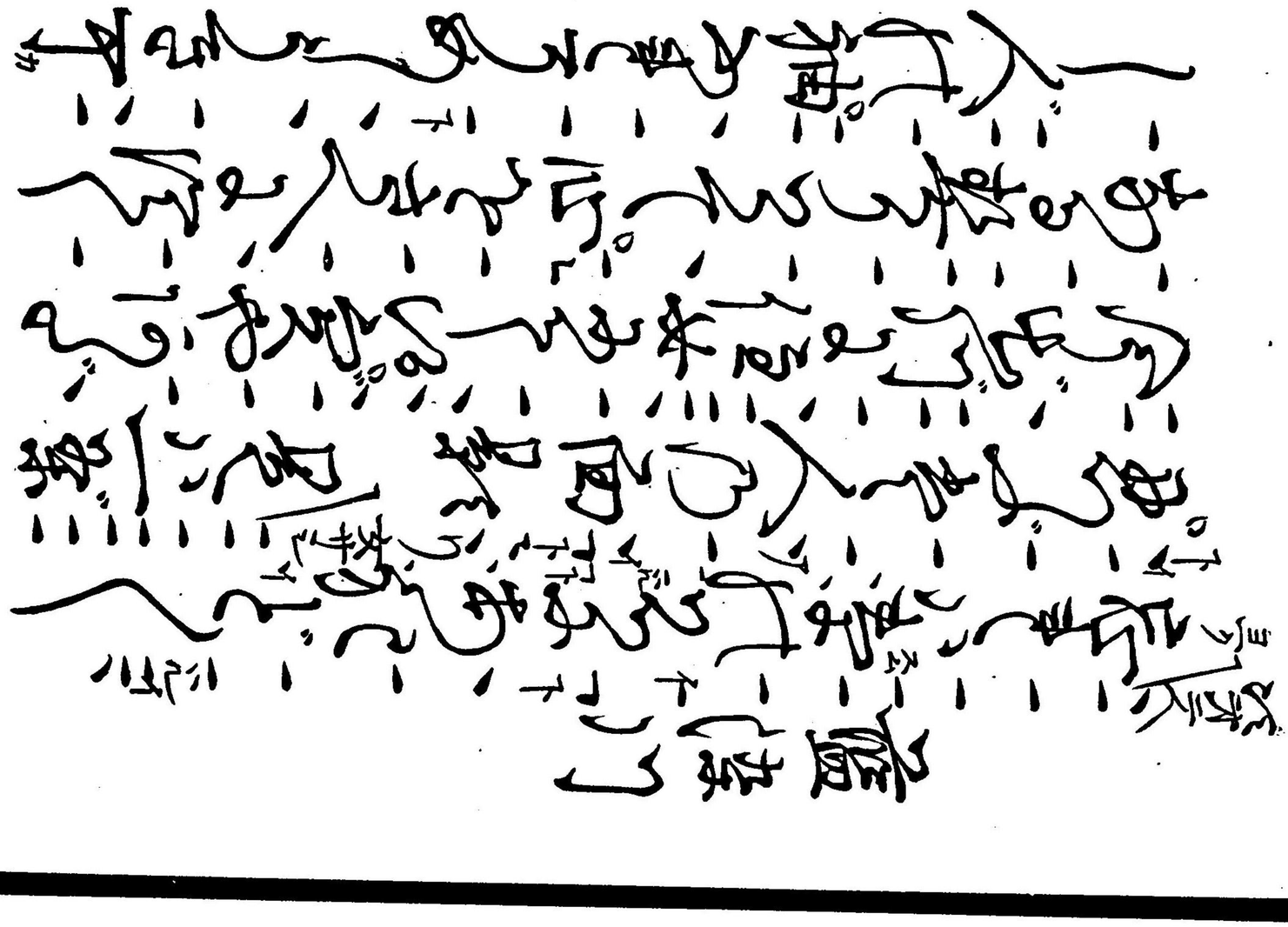
まぶかきぞつりの
上
あらはれて思ひぬるを孤
ぎふ人の
るべきやうにて
むらさきの
思ひよりづ
独心の
思ひあるもとりの

ニアーイ、ハ、ミ、ハ、中、ニ、ニ、ニ

出よと責ぬよ
やれもよ妻とぶぶぐぐあまき
へ神ごけせそを蒙る悪鬼の
神道つぐカダ目をいきほひ
絶ぐぐもたよくてあ
よい車けめぐてあべき時高

とまつぐ
神ぐとぐよ
きこそくいよ
ぐ法ぢ目みつ
ぬるめ
ゆよ

やはせ度かべる
きぐりかぐふ
辨ぢてやて
てぬれみぐぞ
ふてぬれよと



ばらくあり
ぬるゑのもとに
鬼なも角みるもあるべのまし
みぐ為みなと尋ねて
るれぬる南
末うら
迷ふ
ぐうゆよ
ばりへさを
きるべるて行
衣野
るれをもぐ
開踏
うもるて
みきり

女房
長嬢や急

狂ほ宰府やしんみ給ふ作
ぜ山可みそ宿をかりまざる
みそ〻ぜ方へ訪へいるみらの
屋内うちへ楽内中は侍ふれ
みそ海りは女ぐ　見ぶ教方
ぜ去みて侍ぶ宿をたのか

久　侍ふ申は男ぶ女性旅べ
みそは狂ほ風奥間ほ置中うう
ぜ教みて侍ぶ方へ虫へ久　女い
ふ中作ぜ可み宰府の神
豆殿と中へ人の海りは　侍
ぜ可山在可りあるぐみそ

宮殿荒れもて宮内去みて
都ずりつくことづくまるは
神主殿へしまく勢まきて治り
くへり　安き宮守作
猟（ヤガ）て面て赤きぎるみて
は　女　言う　神やぶぶ

いろぶ山又を神立殿へしまつせよ
と申さまして長柄山さ
んば杉さまを人をつまを申さ
まさは いまだ某屋敷に居
申 言語道断 此様の居
やうとぶなぎ山猫なるものなき

さは 内ぶやうて遣出申さ
うまざるみさは いろふ旅人
へ申 作物又を神立殿
へ御見ふ者さは 猫を居
ぶぶ守を給りて作 忌で虎
ろく 文 暮れとを申居

ひもとけがきぶやうで御ぞ手
をみうざるみさは御ぢり脇
変らへだ杯のとうみるるも
第でり遠ゴ国ふ独りハりが
しいう模めづーーきんまきて
ちまて古りあと思るいへぐ。

対面申守ハ有まづいる是を
梅ぶ世ど方へ中ぶ。本ぢり讃
ふハ不背セウあまぶ。親有た思
べうしぶ。ちやく起み御結
ぺトぷーーーまあ浮まーーなーーあ
紀ーーイぶーーーゆめ如あ清

まーイヤ（子丙）いふ母上ぱ（子丙）
古歌さ引ひそ梅ぐせ如く
引へば御心やさ（女）わぼめ勢
（女）宮ぞ（ゲニ）ぐ（ゲニ）も愧（バヅ）ぐ（ゲニ）や父ぐ心
乃かてる宮（ト）ぞ（ト）ぱれ（ト）へよ歌
くと男（ト）ぐ（ト）や古ぐを父よみき

ぱ（セキ）ぐ（ゲニ）をぞ（ア）やさ（ア）わ（ア）ひて
ら（ア）ぞ（ア）ぐ（ア）使（ア）ひ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
孤（ナヂ）と（ア）ぞ（ア）へ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぱ（ア）れ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
（子工）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）
ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）ぐ（ア）

三ヲ

ゝ頼もきることそ不ゝくるまも
うれうきるこて御ゝかきゝ
心の闇れひゝきゝふ旨う
ゝまあき道のべの便とまて
ま強きへゝかゝまあきゝ分とまる
べしも思ふまゝ独りぶとの

ゝ置べきゝ
廿三
いふ中の御痛うゝべ仏
厭すり出可ふ申あとの
ちゆみゝ間忌てとけやを
もゝ行方へもゝ古也あゝふぎる
みて作女いふ梅ぶせ子行

ゆるさぬぞ　子　世まず都よの
ぐ〳〵ゆも人〳〵同さすぐふいく〳〵
ばおもまある扇宮みこ立さく模
くゞやとれもよまりおとも
見くみまうゆく　子　いやく母
の待きゝき心もとまくは狂

女　詞まゆゆ
てやまの父こう賜り待ふる
母ゞ心れ初ゆべきゆゆたと
ハ此可みこ　上ヤヒ　母がかくさを待待
へ　子上　母の伝をふ　ゝ　ゝ　ゝ

りあまをやだ安うぬ男る子
ぬきもゆゝきぬ袖のうらきひ
き留らぬて
青
思ふづゝふ母ぐゝかれば
涙いくやうるぬ今ひ
きみりあ兄ふ角ふ陶ふ道

親ざゝ涙ひ女子

ものおもへとゆゝのほりそめ
て蓬屋ぐはふ分をるゞ出く
行とやぞおいそめげふ人のを
をるぎゝるやを申かいる根ゥる
者ぞ立ちそてどやと花作や。
ぞ語道ぢいりあるもの裁を

サコ

なほ、いとゞ、菜ど、可み、萌りたる、
姓みて、作ばいふ、なほ、梅ぞ、
母ごれ、分を、扱ぶ、てゐぞ、ぞ、
ぜ、作へ、なほ、母ぞ、
れ、待、習、模、やは、ま、母ごの、ゆ、て、ま、
し、ま、紛ば、社、頼、を、思ふ、

つ、ふ、ぞ、ば、ゐ、ゆ、ま、す、や、
ゆ、ま、ま、ま、ぬ、流、塗、れ、て、
ふ、ま、ば、母、さ、へ、み、指、ば、と、ゐ、る、
ば、ま、ふ、ば、ま、を、べ、き、ま、へ、
の、露、を、の、ま、ま、も、す、や、ら、
れ、ま、て、も、ば、ば、へ、ま、で、ま、を、

一一一

れて集りてはいかゞするそ
はいかゞ推量してはいかゞ某他可
よ作間敷(アマ)綱をひきまくるなはは
いふ物(トモ)ある　古前(ワキ)より　由
は藍染門より人の多く集りて
あるハ綱をとゞ引う叡山(ヱイザン)禁所
ハ可みくあるふ忍ひで皆
あゞれと中(トモ)はくへ　長(ヲサ)はや
あく神宝殿(ヒ)御出(シ)ふてある
ぞ綱をとゞ引う叡山(ヱイザン)禁断の
可みくあ有ぞ忍ぞ皆ぞ
まはくゝ行と人ハ子を投くると

中かやたゆ屏みて海り作り
見へ神立ぶ奴乃古出みてい。意
古し来り有て（ルトモ）謂を古中いへ
心得中（サコ）いろみ中上い。調ま
てハ有て作。人乃子を投る
由中作。ま中みたゆ屏ぶ

ひて謂を中ふりぎるとて
見へし来りて（ワキ）いろみたゆの
屏ぶを投る中ハいろ中
ある去ぞ（サコ）さん作をやこよ
て女性ハ人へを喜ちり作ぶ
迷ぬを投て子を投るよ

中は（ワキ）言語道断都より遥
どりもてるもの遂ぬ人もあり
成もあるもあるもあるもの成れ
きもあるき者はいるやもあるもの
（サコ）あるは如の者の
みも有ぬ（ワキ）手ふ持るふ又は
なみては

（サコ）内に作文するは（ワキ）そ
やふみをすやもて行ぬ者り
（サコ）最ては（ジル）ぬるふ文をそと
人の古後ぎれ度（ギ）ぬ信
（ヲ）いや見ふ毋御の
古形見みるは程よまもせるま

ど　幸都御信ども殺（ヤガテ）為
を中きうずるみては此
方へ給りは父とらしまして
は思ふ梅ぶせがかへかき
おきは憂（ウキ）ふもとより捨書
の衣ぐまでらもあ

ぢふ情（ナサケ）ふたぎばらきぬ
親のらべきらびひろ（スス）ふ出（ヅル）
家よあ捨（ス）物ぢらぐまの信
みて守りれ神と成べきあり
ぢ内（ウチ）よありてきは梅ぢの
侍後ぢ栄今出門寺留主

尚可の御ぶらまく扨ごも所
を京の古時を中務頼滝宰
府の神主や言語道断の次
第みくいものぶら迫ふまそ
のすと狂おるまいるよがるか
ぎ成すとけいらひあれわさ

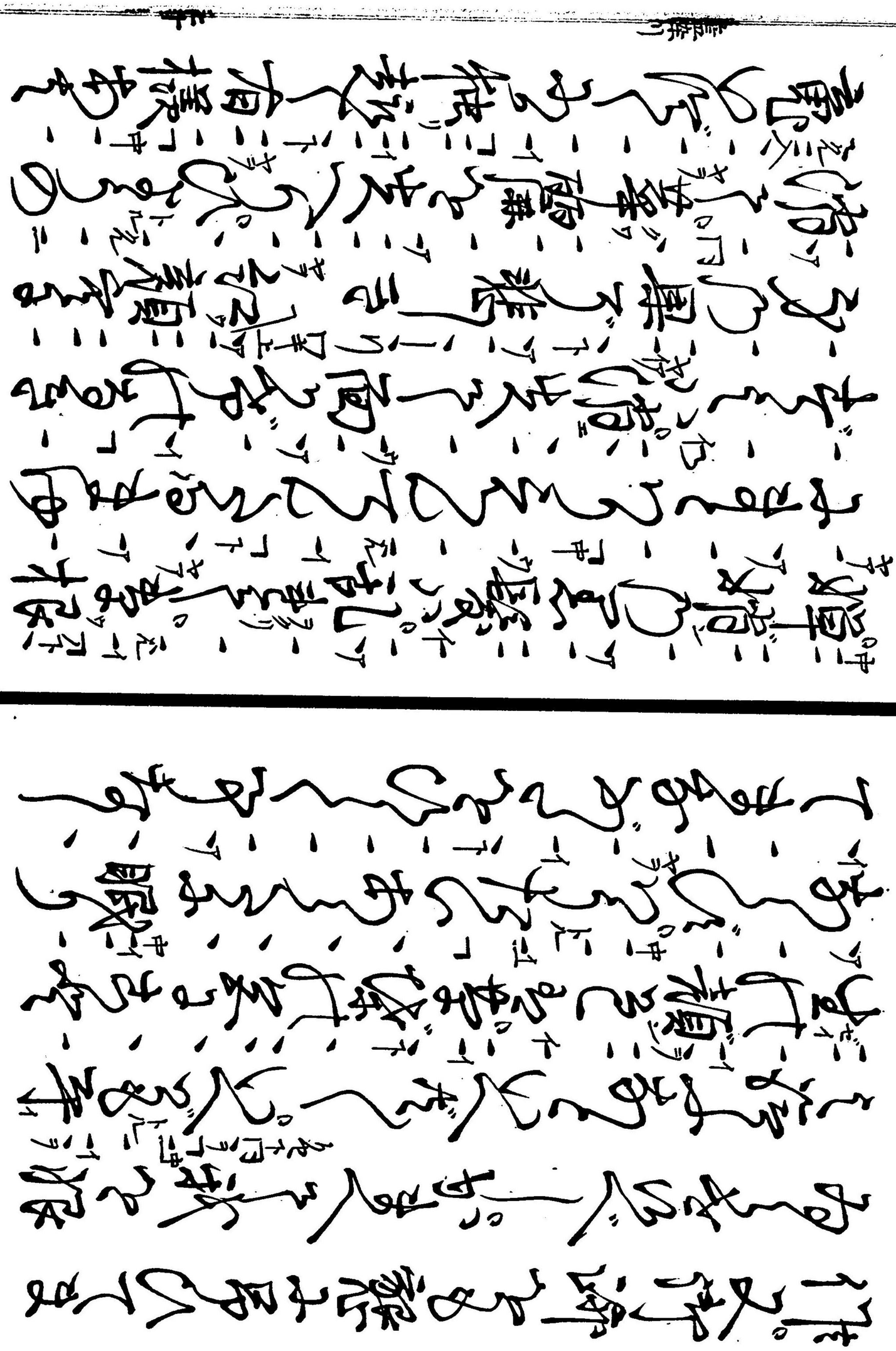
あき去を此方へつきて参り
仕く最ていぶいふ中いる神主
殿のもの伝まうまをと伝
のぶ此方へ御出く蓋ふ便の
去や扱まうのぶよあひ度ば
あきら如ほどふ情まきまさ

ばしあふきをとらぶべ給へ　宮
見ハ哥ゆあるべ　ゆ
狂ぎ涙よ　めもくまぬ心
月ゆ　それとそねど梅
ぬ世ゆ良もも　初しもふ
ぎゆ　ぬ面影ゆ　そもよ

むざんやおもかげ　そ俤ゆ　もすぎ
きゆちゆを　添ゆ　ゆつきゆ
ゆ　ぬ　き髪　ゆ　ぬ　ゆ
見ハぬ　氣　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
射　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
と　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

作意(サコギヨ)充(ツヨ)みそなはしたまひぬ御海
みそなはしたまひぬ(ワキ)宮
海の中ごとくあつて死人をとる
事ふかきれども彼らの心ず
あまりみるびんある間者
かくぬ事をと一回みるぎるふ

く有ぞ(サコ)ぎらひあるう成人
をのきをへ長(ツル)てはやあく
神主殿御出有ぢ皆のきえ
いろふ申は(ワキ)梅も出り寄まを
きくずは梅ぐ世ぐ事ふ某一(ツメル)跡
を濃(ユヅ)り世ぐきくぎるみて



犯せべしるくるるらんの
鳥り頼もし誤り清らきて郭
原より打果てと思るや沿よ殘るん

ワキ

いろふため厠似もの心ヲ的
よ不便よみる間除時の幣帛を
抜ぎ如くらんとぐき似去の

命を二度そ去させじゆと思
みそいるみ

ワキ

ぐそ思い忘みて
ちぶ狂を
ていは去るべらは神を所
幣打つ祓ぜよ事
眠き沈みの祓ん中し事り

謹ゞ再拝かしこ

じゅ十方三寶きいらもじゆ

ゞきらんきいさい三宝前づめも

きりそく帰命孤南無天満宮

弥廣くきうまをさるのまね

くきらうを兼ねらぞいきへ去

ゆるきそめいちよみ陽き西海

はきいろみ安楽寺の地を點で

あ。ナ宝状をまく狩

くくさら如敬家それ地を出て

ぴゞ字府みまそらぞ

頼めきめぢゞ原ぢきもまぞ我

世の中を養ふ限りは序歟ありよ鳥動して夜ぞ寝
ミ
き多年立寺日ふ風ぞ
蒙るなれども西都は
よくもべきもとばそらぬ死
して悦ぶ有難ちるひや

レテトコミ中元元一ウ元元下中元一ウ
相者社とヤ法性の都を
もくるば同語れ境よいの去
ずりまのうやうとある
若海よ深くて音捉豆繋よ至
ばくよ宿国ちる面ど考
ントトル元ジ元ト元元ト元
難きんだとを智識かまる

ソニ
きをあひ稱ぜ。拾ひ集めて
あるものも。ヤハ是當社の神恩
ぞとよろこびひのかをそて
ゆつり渡されのかとなれば
神ヲ　元　元　元　元
神をあがめる事り

男ハ
加様に作者が出来良の者接萩
の右ざに豊成ふ仕へ申まの
みそは扱も姫君を一チ人御持
はひとぎ人の説奏みすりぎ和記
世國の境なるぞ雀みるそう

雲雀山

去るひゝ去るの位まゝは猶よ
ぶ〻まで御供申さゝゐへだいるよ
して出へ出べきとだに染り庵
をむまび角痛り申はさる
狂よ侍従ゝ申乳母ぜ去ゝ去ぐの
花を手折秋去ま花とゝり

里ふいぐ従(ユキ)き人よ見を代(シロ)
ま侍姫君ゝを去ぐ申はを
ゐも侍従(ウ)をよびゝ里へ下さ
がやゝ男ゝるゝ申べき申れん
行(シテ)ぐ去て行ぐぞ
里へ出へ行へ
そもまる
さぐ姫ぜ君み

御暇をゆるべ　男
やうて古暇を　女
申里へ出作へ　いろ申べ
きやれるぎやも里へ出そ牧る（ヤガ）
帰まらべし　（ヒメサレ上）　（ヨク）こやかそう
よ煙ゑそ　（シテ上）　まれ日いそ者
ぎよ　（ヒト）　三ツ　宮（名）焼きそ秋

ア　ア　ア　

みかくちぐ心のあるもをぞ
ぐ道せぐ和握まぐ草露い
りまぐ水分流るまく加
くて煙もくえぐ初返りごぐ
ぎうぐもオくぐ余可の
情と頼まんとぐよけぐぞと

引きくく又里へ出さまれく
如くもく顔の雲雀ひく
るやそ路吹く犯い横
萩の石大ぐ豊成くい拭ひと
立元
うく犯狩場も回書け拾ぐみて
時折節け興ぐとます
あづき

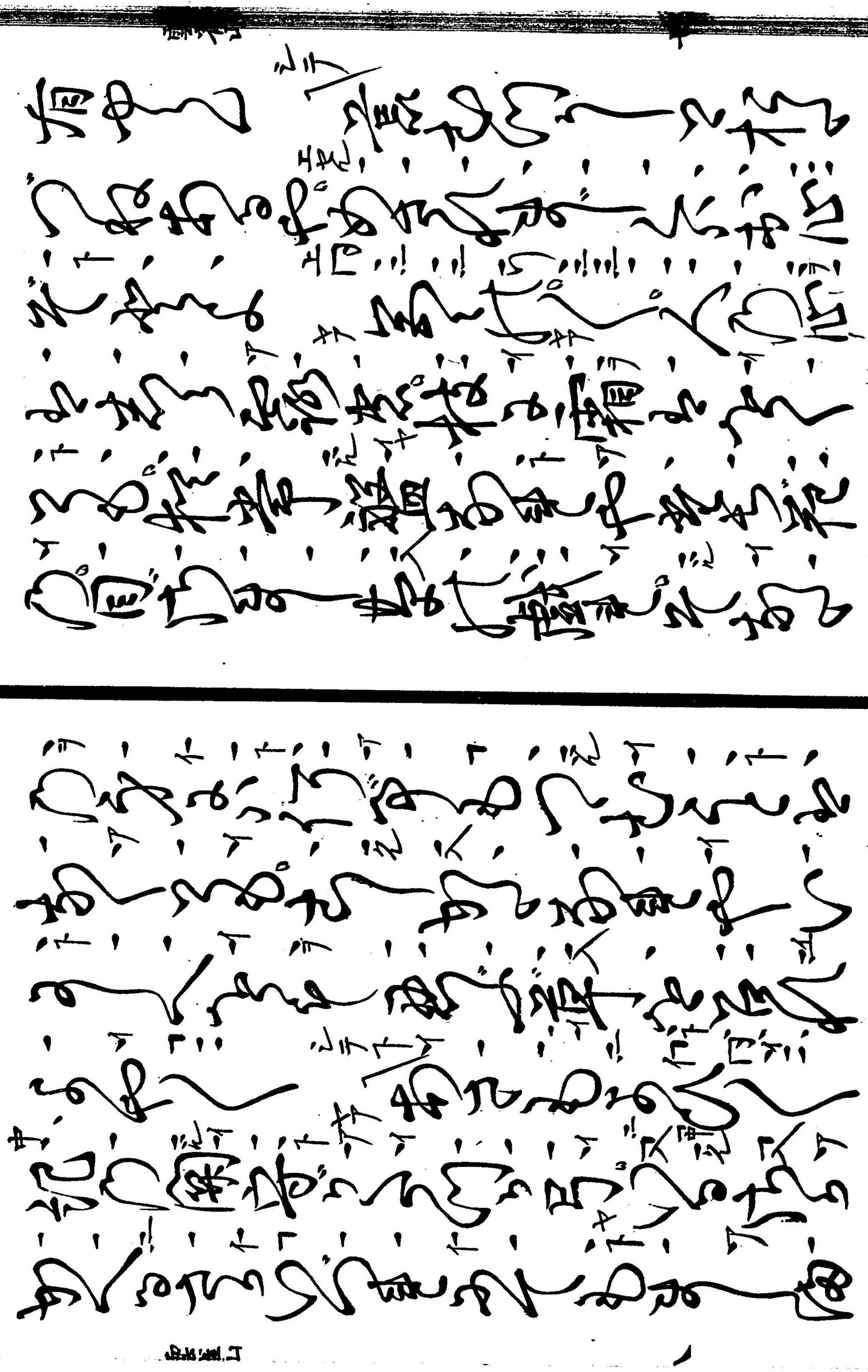
はまゆくまにまに　あれば　くれ　霞む野
山を　揺ぎ　雨か降きぬ　同じ
くれぬるも　花の陰よ　宿る
袖又　月も　袖　袖　雪よ　雪
くるのは　くるのきんや　よつぐ
天の川　ぞ　鳴　きぬ

ミニラ　シテサレ
くれ　ちつ　き　待　花　きちぐれ
の香　とう　ぐ　ぶ　む　ぞ　れ　人の袖の
香ぞ　する　宵や　昔も　君の
袖ある　菜を　ぬつめ　常　の
國まで　行　ぞ　れ　我も　君
の　古　為　ぞ　ある　花　を　手　折

はぎ
ぬ
ぬ
ぬ

いとゝ（トモ）寿申べき事は、其花を
ば行ひ為よ持参てゐぞ（シテ）き
むだ思ひ扱ある人よ、まゝ扱
為よ持てゐる。行きみても仕へ
笑者よめで、れ人へ（トモ）花樹前（ヲ）
よそゝぐ辞いまず、鳥林（ヲ）

ゐよ鳴て（カ）あ（ア）ゝだつ（ラカト）ま（ア）ゝ、ぶ（中ニ）
も毒ぬる花ゐ種、笑るれや
ゝ犯ぬ（ア）ゝ、ぶ（ア）ゝ（ニ）ぶ（ン）ぶ（ト）ゝ物ゆ（ト）ふ
ゝ草、心（イカ）ふ（ト）ゝ扱ふ（ト）ゝ
よ（トモ）ゝ笑面白き賣もれ
備て花て賣申ぶ（キ）ゝ謂の



せおごろや花はまだ
きりぶくやうに花もぬひと
そ打ちき
買ろうはべしどもたれら方
と弱んぐろう御物語りへ去
びぐ物さて捨てゆ鳴ハ

上月ニ元又、
花ぬき星ふまくやあるへと
心ろくなるぶ小数
みぞあやまり、音ぶ乃ほほ
ころびぶ蹴ハ夜ぬ乃人れ
折そそ打ぐろ去の夢の
中胡蝶ぬあそび家香ふめぐ

しもられぬ　心の花　なりにけり
白雪の　ふるさとの　梅の花
見てのみ　春の　心やり　つる
そこなる　ひとの　春　なれば
ちもうへ　きて　ふるまで　有ける
そまはら　ふるまを　へ

ぶる　杜若　ぬれ　つゝ　ぬる　衣　きるぐ
の　面　歌　の　ごと　なる　かは　よ　鳥　の　鳴
うつる　ら　ん　ま　ま　に　ま　ま　に　ま　ま　に　ま　ま　に
きゝ　の　ち　れ　き　よ　か　て　ぞ　花
よ　め　で　鳥　を　と　ゝ　や　む　人　心　男
の　家　も　つ　ま　ぶ　け　ま　ぎ　ら　の　花

夜野と分かれしもいまだ
み人きたらねば
あまぎやなるまぬ
さまたもかしまくみたい
けふもかふ
やどれる相の二あるとぞ

やくもは吉野の人保可めよ成て
のづくきや高間のゝ先山顕に
づきぞ愛よ紀の路れさうひるを
雀みみ隠居ぞあくみ
まめぐもあくき谷陰の鶯れ草
ぐきあくねれ高よくれ雨

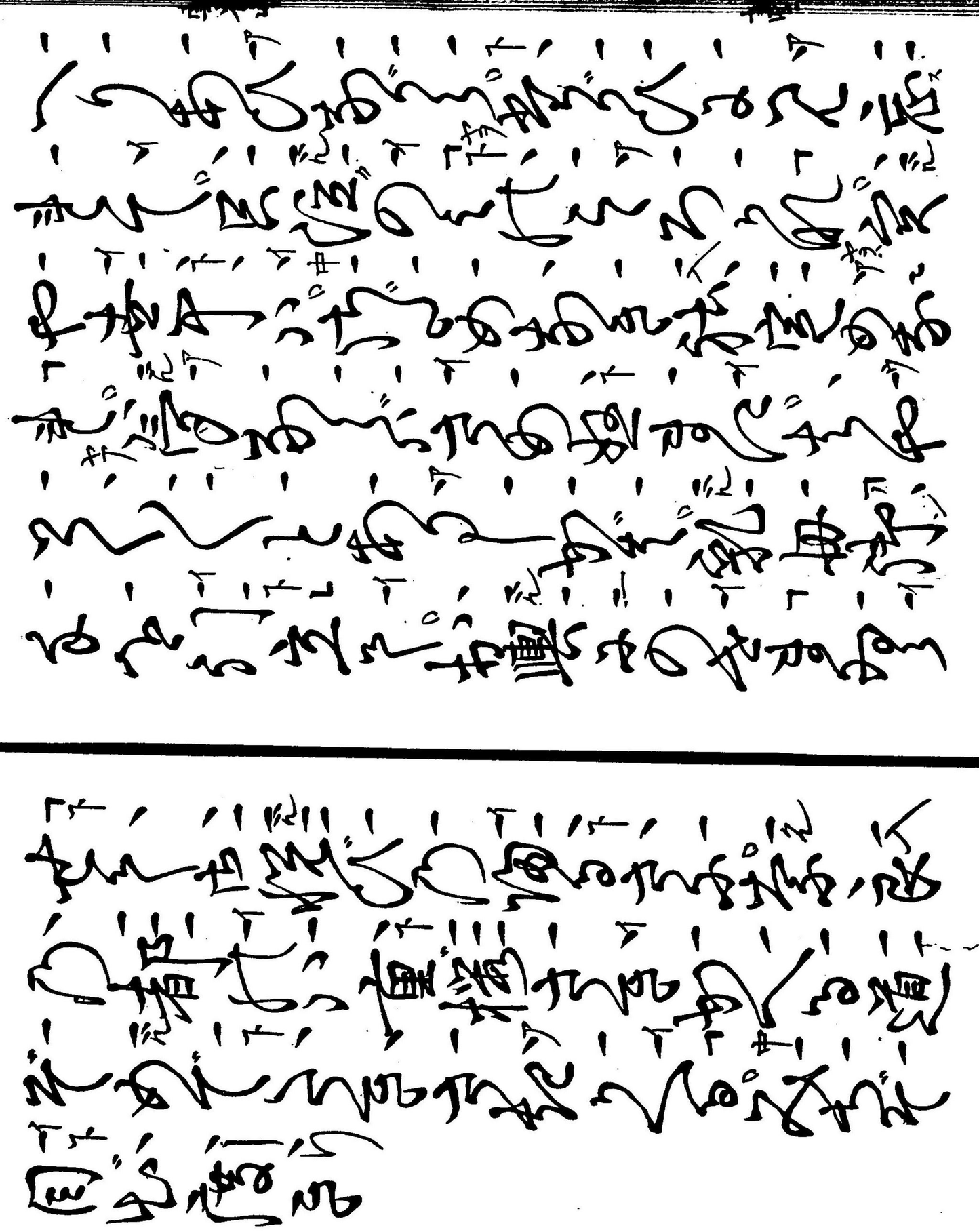
あくてもきくやぬ所
よられぬ
かれ果ぞいぶらうきぞとき尾
ふ月、ふぐきもきぬ
赤色の
てぶかぐ
けぶ雲雀
やあいふたとい

乳母の侍ぐ
とぶん長きて
姫よりあき
出ひ
梅きれぐ
ぐ

よ濃の国を結び隠し置くと
ハ守ら老ひ侍ぬるを
おくとをくて社拙くおくく
姫ハ心ぞ
しく思ハ
ぬ人の
ハ人を待ち
ひ給ふ中ハ将姫の行ふ
世ふまし
ものうそ
まの老ぞ
ね給ふ

ちるとあれども花(セン)はさくる
父ぐらろ涙の雨もこゆる
もれとぞもあり
ありぐ[illegible]べ
[illegible]ことは様よ[illegible]ひら
く法天氏(ウヂ)の神(ジン)も正(サ)ふ照覚
あるべきあり

御出(イト)あまりとぞ[illegible]
雲雀(ヒバリ)の草(ソウ)むとさきく冷
陰(カゲ)ほりと道(ミチ)あ[illegible]
[illegible]ぐとろれ[illegible]
むまびまを[illegible]
孫ぐ[illegible]親と[illegible]



255
62

明治四十年三月十日印刷
同　四十年三月十五日發行

版權所有

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉
（電話番町三百十番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助
（特電話二百五十番）
（振替貯金三五五貳）